ヴォロンツォフ宮殿のコスモポリタン的空間
——M.S.ヴォロンツォフの啓蒙思想——

花田智之

はじめに

クリミア半島南東部に位置する、軍港セバストポリから約 50 キロメートル離れたところにヴォロンツォフ（アルプカ）宮殿は存在する。黒海沿岸に建設されたこの宮殿は、標高 1234 メートルのアイペトリ山を背にして、まさに山と海という大自然に囲まれたところで静かな時を過ごしている。

この宮殿は 19 世紀半ばにイギリス人建築家エドワード・ブロア（イギリス王立建築学会の創始者）とイタリア人建築家ボナーニによって設計された。宮殿は 5 つのブロックに分かれ、北側の外観はチューダー様式だが南側の黒海に面したポルタイユ（玄関）はアラベスク模様とモスクのような装飾ドームがある。そして壁の縁にはムハンマド 1 世の残した言葉「アッラー以外に勝利はなし」の文字が刻まれている。宮殿内部の各部屋はそれぞれ中国風書斎、豪華なリビング、植物庭園とどれも特徴的である。

中でも目を引くのは、絵画・彫刻・陶器のコレクションであり、チェルネツォフ、ボソーリ、ガウチ、グロスなどの貴重な絵画が今日まで保存されている。また図書館や書庫も充実しており、ロマノソフに代表されるロシア人の著作だけでなく、ヴォルテールや『百科全書』(ディドロ、ダランベール) などのヨーロッパの著作も数多く見られる。この他には、楽譜や地図のコレクションなども保蔵されており、どれも今日的にも価値の高いものばかりである。このようにヴォロンツォフ宮殿は、外観においてはイギリス文化とイスラム文

ヴォロンツォフ宮殿

モスク型の装飾ドーム

化の融合が見られ、宮殿内部ではヨーロッパ文化と中国文化の融合が見られ、そして所蔵品においては世界中の貴重品が収集されており、19 世紀半ばのロシア帝国において極めて特殊なコスモポリタン的空間であったことがわかる。

本稿では、このヴォロンツォフ宮殿の創設者として知られるミハイル・セミョーノヴィッチ・ヴォロンツォフ（以下「M.S.ヴォロンツォフ」と略記）という人物に注目し、この宮殿に反映された彼の思想的背景を明らかにする。そのためにまず、彼の生まれ育ったヴォロンツォフ家というロシア名門貴族としての家柄に焦点を当て、親ヨーロッパ的な啓蒙思想という、ヴォロンツォフ家に代々継承され、そして彼の青年期に経験したヨーロッパ貴族生活により培われた特徴を見出す。つぎに、彼の新ロシア総督時代（1823–1844）の治世を政治史学の観点から分析し、M.S.ヴォロンツォフという総督個人の思想を強く反映したと見られる「政策パッケージ」について論述する。これは彼の思想的背景を理解するために極めて重要だと考えられる。

そして結論では、ヴォロンツォフ宮殿が M.S.ヴォロンツォフの思想的影響を受けて建築されたもので、そこに見出されるコスモポリタン的空間が言わば、彼の親ヨーロッパ的な啓蒙思想を暗示していることを述べる。なお本報告は、昨年 9 月にクリミア自治共和国で開催された国際ヴォロンツォフ研究会「ヴォロンツォフ家とロシア貴族 : 東西の間で」[1] に参加した私の学会報告を基調とする。

1. M.S.ヴォロンツォフの啓蒙思想

1–1.　M.S.ヴォロンツォフの半生について

M.S.ヴォロンツォフは新ロシア総督としてだけではなく、ロシア史全体にその名を残しているが、残念ながら日本ではあまり知られていない。彼は 19 世紀前半のロシア貴族として異色な経歴の持ち主であった。幼少期をイギリスで過ごし、当時の啓蒙思想や自由主義思想に触れながら、フランス革命をロンドンで経験した。青年期に父親 S.R.ヴォロンツォフ駐英大使の外交業務を手伝いながら、ヨーロッパ各地で多くの知己に恵まれた。そして彼はナポレオン戦争（クラオンヌの戦い）の英雄として、パリ占領後のロシア軍最高司令官として、新ロシア総督およびベッサラビア総督として、そしてカフカス全権総督として祖国ロシアのために忠誠を尽くした、いわゆる地方エリート貴族であった。[2]

とりわけ、彼は新ロシア総督として独自の手法を用いながら、オデッサとクリミアを中心とした南ロシア地方での政治経済圏の確立と、ベッサラビアなどの「東方問題」を含めた黒海沿岸でのロシア帝国領の拡大、そして幅広い社会層を焦点に当てた教育政策や現地新聞『オデッサ通信』の発行や、帝国オペラ劇場の設立などに積極的に取り組んだ。その

[1] 学会動向については、拙稿「ヴォロンツォフ家とロシア貴族 : 東西の間で」『北海道極東研究学会』87 号、2006 年、33–35 頁。

[2] 彼の生涯については、拙稿「M.S.ヴォロンツォフ研究の視角と展望　(1)　カフカス全権総督（1845–1854）の統治政策を中心に」『北大法学論集』第 57 巻 2 号、2006 年、336–368 頁。

結果として、オデッサは彼の推進した蒸気船貿易ネットワークを駆使してヨーロッパ文明を吸収し、およそ 20 年間でペテルブルグ、モスクワに次ぐロシア第三の商業都市としての飛躍的な繁栄を見せた。またクリミアの白ワイン（マスカット）生産は、現在に至るまで世界的に有名な主要産業として定着し、またクリミア・タタールやザポロージェ・コサックといった新ロシアの多民族性に配慮した宗教寛容政策なども実施された。

このように M.S.ヴォロンツォフとクリミアは歴史的にとても結びつきが強く、また彼の子孫たちも当地に邸宅や別荘を所有したことが広く知られている。[3] 新ロシア総督 M.S.ヴォロンツォフはまさに、現在のオデッサやクリミアが発展するための歴史的基盤を創造した人物として歴史的に位置づけることができる。

【主な経歴】

1782 年 5 月 19 日	サンクトペテルブルグで生まれる
1786 年～1800 年	駐英大使である父とともにイギリスで生活する
1800 年	ロシア帰国し、陸軍中尉。カフカスに赴任する
1812 年	ボロジノ会戦にて負傷するが、ナポレオン軍に勝利する
1815 年～1818 年	フランス駐留軍ロシア最高指令官となる
1823 年～1844 年	新ロシア総督兼ベッサラビア総督に就任する
1845 年～1855 年	カフカス全権総督に就任する
1856 年 11 月	オデッサにて逝去（享年 74 歳）

1–2.　ヴォロンツォフ家と啓蒙思想

彼のこうした独自の施政を理解するため、その生い立ちであるヴォロンツォフ家という家柄や、また幼少からのヨーロッパ生活という教育環境に焦点を当てながら、そこで培われた親ヨーロッパ的な啓蒙思想に注目したい。これは総督という 19 世紀ロシア帝国の地方（辺境）支配制度が、総督個人の裁量を最大限に発揮しうる制度的保障をもたらしたという理由だけでなく、より重要な点として、新ロシア総督時代に限らず彼のすべての行政軍事キャリアにおいて、彼の思想的背景を色濃く反映した独自の諸政策や言動を窺うことができるからである。なおここで親ヨーロッパ的な啓蒙思想とは、ヨーロッパ文明への親和性や、18 世紀末ヨーロッパで盛んだった人間の自立と理性の普遍性を主張した合理主義や自由主義への傾倒といった、幅広い解釈を有する概念として定義する。

ヴォロンツォフ家は代々ロシア有数の名門貴族で、彼の曽祖父 I.G.ヴォロンツォフ（元ロストフ知事）、祖父 R.I.ヴォロンツォフ（元ウラジーミル知事でロシア・フリーメイソンの中心人物）、祖父 M.I.ヴォロンツォフ（元ロシア宰相）、叔父 A.R.ヴォロンツォフ（ロシア宰相を勤めながら国家評議会の設立などの国家改革に尽力）に代表される、国家の中心人物を数多く輩出していた。ヴォロンツォフ家の祖先はヴァイキング出身セミョーノフ・アフリカノヴィッチであるとされ、11 世紀に北ゲルマンからキエフを訪れて、ヤロスラブ賢

---

[3] 1920 年ごろまで、アルプカの大部分はヴォロンツォフ家の所有する宮殿や邸宅が立ち並んだ。*Филатова Г.Г.* Портретная галерея Воронцовых. Вып.1. Симферополь, 1997.

公の治世を助けながらロシア正教を受け入れた。そして 14 世紀後半ドミトリー・ドンスコイの時代にセミョーノフの子孫フョードル・ヴァシリエヴィッチが「ヴォロネッツ」という姓名を与えられ、以後ヴォロンツォフになったと記録されている。[4] その後、18 世紀に I.G. ヴォロンツォフが三等文官に就任して皇女エリザベータの政治に積極的に関与し、その長男 M.I.ヴォロンツォフが 1758 年に宰相にまで昇進することで、ロシア名門貴族としての地位が築かれた。

ヴォロンツォフ家の中で特に有名な人物として、M.S.ヴォロンツォフの叔母にあたるエカテリーナ・ダシコワを挙げることができる。彼女は文学や哲学を中心に幅広い教養を持ち合わせていただけでなく、当時のヨーロッパ事情にも通暁していた。そして彼女は 1769–1772 年の間にドイツ、フランス、スウェーデンを歴訪し、フランスではディドロやヴォルテールと親交を持った。その後はイギリス（エジンバラ）で生活し、そこで学会や社交サークルに参加して絵画・彫刻をコレクションとして購入した。また彼女は、帝国サンクトペテルブルグ科学アカデミー初代院長としてロマノソフ著作集を編纂したり、事典『ロシア・アカデミー』の作成や「ロシア劇場 Российский Театр」という雑誌の公刊にも尽力した。しかしエカテリーナ 2 世との確執により失職し、晩年はノヴゴロドでの隠居生活を余儀なくされた。[5] 彼女の死後、大量の蔵書や絵画コレクションが M.S.ヴォロンツォフに相続され、その多くがヴォロンツォフ宮殿にも保存されている。

M.S.ヴォロンツォフの父親 S.R.ヴォロンツォフは、幼少より彼の叔父にあたる M.I.ヴォロンツォフによる熱心な英才教育を受けて成長し、ルミャンツェフ司令官やスボロフ司令官のもとで数々の軍事功績を挙げた。しかし 1762 年クーデター以後はエカテリーナ 2 世との政治的な確執のため、一時期イタリアで静養していたが、1782 年ヴェネチア大使として外交職で国政に復帰して、1785 年イギリス大使に任命された。そして M.S.ヴォロンツォフは 4 歳から 20 歳まで、妹キャサリンとともにイギリスのセント・ジェームス宮内での生活を始めることになった。

イギリスではローザンヌ出身のスイス人ジョリが専属の家庭教師となり、フランス語や英語をはじめとしてギリシア語、ラテン語などの幅広い語学力を身につけた。またヨーロッパの知的教養に触れる機会に恵まれ、聖書や教会文学だけでなく、ホラティウス、カエサル、キケロ、タキトゥスなどのローマ古典に関する数多くの著作や、ヴォルテール、ディドロ、エドマンド・バークなど同時代の啓蒙思想的な作品にも触れていたことが知られている。

しかしながら、彼の教育環境において啓蒙思想とともに大きな影響を与えたのは、父親 S.R.ヴォロンツォフと叔父 A.R.ヴォロンツォフによるロシア貴族教育であった。彼らは M.S.ヴォロンツォフが啓蒙思想やヨーロッパ文化に親しんで知的教養を深めることを積極的に推進した一方、自分たちがヴォロンツォフ家の継承者として施されてきたように、あくまで祖国ロシアへの忠誠や献身さを誇りに思うことが最も重要な教育課題でありまた義

---

[4] Акты, Собранные Кавказскою Археографическою Комиссию （далее. АКАК）. Т. 10. Тифлис, 1885. С. VII.

[5] *Филатова Г.Г.* Портретная галерея. С. 12–14.

務であると考え、M.S.ヴォロンツォフに対して「母国語」であるロシア語教育を徹底させた。毎日ロシア文学やロシア史の勉強に多くの時間が費やされ、また貴族として乗馬の訓練や森林の散策（プログルカ）も実施された。

こうして M.S.ヴォロンツォフは、イギリスで多くのヨーロッパ文化に触れながらも、あくまで「ロシア人」として育てられ、その意味で祖国ロシアへの忠誠心を強く抱いた人物であったと見られる。彼には「出身だけでなく、何よりも精神的にロシア人であること（ザハロワ）」[6] が求められ、成長とともに親英派のロシア貴族という意識を自他ともに強くするようになった。また教育上の配慮から、彼はイートン校に入学することはなかった。これはイートン校が掲げる政治第一主義というエリート精神には共鳴していたものの、校内での体罰への懸念や、また学内の団結性を深めることが家族からの自立を促して、ヴォロンツォフ家という血縁や祖国ロシアを忘却することを危惧されたためと考えられる。

そしてM.S.ヴォロンツォフは16歳から父親の秘書としてヴェネツィアやパリなどのヨーロッパ歴訪に同行した。そして彼は青年期にヨーロッパで数多くの知己に恵まれることで、啓蒙主義や自由主義を幅広く学ぶ機会を得た。ナポレオン戦争で戦友かつ連合軍最高司令官となるアーサー・ウェズレイ（のちのウェリントン公）とは、このときに親交を深めている。

ここで重要なのは、19 世紀前半のロシア帝国で M.S.ヴォロンツォフのようにイギリスを中心としたヨーロッパ社会で啓蒙思想を学ぶという経歴が、とても異色であったという点であり、これは彼の思想をロシア帝国のなかで独自のものとした、大きな要因だったと考えられる。というのも当時のロシア帝国において、啓蒙思想の多くはエカテリーナ 2 世の時代に若者を中心に普及したフランス的な啓蒙主義に影響を受けたものが多く、19 世紀前半には君主制と農奴制を廃止するという、デカブリスト的な民主主義の源流ともなった。他方、ロシア大貴族を中心にこうした急進的な啓蒙主義に反対するかたちで、君主制と農奴制を堅持してゆく保守主義的思想が、いわば反フランス革命そして民主主義への反動として存在していたのである。

この中で M.S.ヴォロンツォフは、ロシア皇帝への絶対的な忠誠を示しながらも、農奴制の段階的な解放と農民階級の身分保障を主張するという、どちらにも属さない独自の立場を貫いた。つまり彼の思想的背景にはヨーロッパ生活で育まれた啓蒙思想と、それを根本から支えるヴォロンツォフ家としてのロシア貴族精神との融合が見られ、そこにはヨーロッパ世界を中心としたコスモポリタン的な世界観を指摘することができる。[7] 彼のこうし

---

6 *Захарова О.Ю.* Генерал-Фельдмаршал Светлейший Князь М.С. Воронцов. М., 2001. С. 24.

7 M.S.ヴォロンツォフ研究者であるミケーシンは、彼の思想体系に義務 долг という概念が重要であることを強調する。ヴォロンツォフ家の手記や往復書簡が収められている『ヴォロンツォフ公アルヒーフ』において、彼は義務をいう言葉を多用しながら、自身のロシア貴族としての責務について「ツァーリの命令を遂行することは、それが皇帝や祖国のための義務が最高のものだからではなく、命令に着手し、自己の決断を実行し、当為を完結させることが栄光をもたらすから」と述べている。これは彼の啓蒙思想や貴族精神では説明できない、当為を遂行するという職業倫理にも似た思想を見ることができる。*Микешин М.И.* М.С.Воронцов. Метафизический портрет в пейзаже. Монография. // Философский век. Альманах. Вып.2. СПб., 1997.

た啓蒙思想は、その後の新ロシア総督やカフカス全権総督の治世における言わば行動規範として、またヴォロンツォフ宮殿の空間イメージとして十分に窺うことができる。

2. M.S.ヴォロンツォフの「政策パッケージ」

M.S.ヴォロンツォフの思想的背景を別の角度から分析するため、本節では彼の新ロシア総督時代の治世に注目する。これは彼の総督としての実践に着目することで、新ロシアとその後のカフカスの両方の治世においてある種の共通した M.S.ヴォロンツォフ流「政策パッケージ」を見出すためである。これは新ロシアもしくはカフカスという個別の地域だけを対象とした研究では導くことのできない政治史学的な観点であり、両方の（全権）総督に就任した M.S.ヴォロンツォフに焦点を当てることで得られた学術的成果と言える。

ここで言う「政策パッケージ」の骨子として、大きく三つの柱を指摘する。第一は、現地エリート（貴族と聖職者）の積極的な登用と現地伝統の包摂である。彼は現地エリートとの対立ではなく友好的包摂を目指した。特に新ロシアでは、現地貴族と宗教指導者をロシア帝国の行政機構に取り込みながら、同時に宗教マイノリティー（モロカン派、ドゥホボル派）やユダヤ人に対する信仰の自由を保障するなど、それまでのロシア人総督とは明らかに異なる治世を行った。これは総督への一元的な権力集中ではなく、多様性を認めながら統一してゆくものであった。

第二の柱は、地場産業の育成とヨーロッパへ向けた蒸気船ネットワークを駆使した自由貿易構想である。とりわけ彼は白ワイン総督と形容しうるほど、クリミアやカフカスでのワイン生産と、それを蒸気船ネットワークを用いてヨーロッパ全土へと販売促進してゆく自由貿易の振興について尽力した。また領内では銀行制度の確立や交通インフラの整備などの産業政策にも大きな貢献をなした。これらは M.S.ヴォロンツォフが有するヨーロッパ文明に対する親和性や、合理主義的な経済感覚がなしうるものと見ることができる。また同時に、新ロシアとカフカスが隣接していることは決して偶然ではなく、自由貿易市場により M.S.ヴォロンツォフが構築した「黒海＝カスピ海圏」といった、新たな経済領域イメージを考えることもできる。

第三の柱は、ロシア帝国を媒介とした教育水準の向上である。M.S.ヴォロンツォフの施政ではギムナジヤ創設を中心とした幅広い社会層への教育の普及や、現地語教育の奨励など、総督府が世俗権力として教育を担う役割が拡大した。また帝国オペラ劇場や現地新聞の発行などの文化振興も進められた。[8] これは一方では、領内の教育水準を向上させるという、まさに啓蒙思想的な治世でありながら、同時にロシア帝国を唯一の教育システムとして確立してゆきながら、それまでの伝統的な教会権力を教育の場から排除してゆく支配構造と見ることもできる。

このように、M.S.ヴォロンツォフは独自の啓蒙思想に基づいた「政策パッケージ」を用い

[8] *Пряшникова М.П.* Итальянская Опера в Одессе во времена генерал-губернаторства Михаила Семеновича Воронцова (1823–1844) // Воронцовы – Два века в истории России. Вып.6. 2001. С. 97–130.

ながら、思想の実践として新ロシアやカフカスというロシア帝国のフロンティアにおいてヨーロッパ文明を駆使した新たな治世を確立した。この観点を重視すると、彼は親ヨーロッパ的な啓蒙思想によって「東西の間」の架け橋になろうとしたロシア帝国の総督であったと評価できる。もっともこの実践は親ヨーロッパ的ではあるが、決してヨーロッパ的価値を頂点とした絶対的な一元的空間ではなく、宗教寛容政策に見られるような、多様性を認めたコスモポリタン的空間であった。こうした治世の行動規範こそ、彼の生まれ育ったヴォロンツォフ家とヨーロッパでの生活環境により育まれたコスモポリタン的な世界観なのであり、ヴォロンツォフ宮殿の空間イメージとも密接に重なるものである。

おわりに

本稿では、ヴォロンツォフ宮殿に見られるコスモポリタン的空間に注目することからスタートし、宮殿の創設者であった M.S.ヴォロンツォフという個人の思想的背景に焦点を当てることで、彼の親ヨーロッパ的な啓蒙思想という特徴と、それが反映された彼独自の「政策パッケージ」を明らかにすることができた。ヴォロンツォフ宮殿には 19 世紀半ばロシア帝国の「両極」とも言える、人工と天然、海と山、自然とヨーロッパ文明、キリスト教とイスラム教、現在と歴史、ヨーロッパとアジアといったものの存在と、それらが多様性を打ち消しあわずにコスモポリタン的空間の中で融合していると見ることができる。こうした多様性が統一された世界観は、M.S.ヴォロンツォフが治世した新ロシアやカフカスでの「政策パッケージ」をも象徴していると見られる。

最後になるが、現代の M.S.ヴォロンツォフ研究の動向について触れたいと思う。本テーマに関する研究は、現在ロシアで再び大きな盛り上がりを見せている。これは一つにはソ連崩壊後にマルクス主義歴史学が影響力を弱めたことで、帝国時代の歴史における個人の役割が重要視された歴史研究が復活したことに起因する。またカフカス統治史として M.S.ヴォロンツォフ研究への学術的関心には、チェチェン問題という要因が挙げられる。今なお混乱の続くチェチェン情勢は、非常に残念な契機ではあるがカフカスに対する多くの人びとの政治的関心を高めることになり、いわば同時代的な要請として M.S.ヴォロンツォフに注目が集まったことは、認めざるを得ない。本研究がこれら現代の研究動向の一端を担えれば幸いである。

＊本稿で使用した写真はすべて筆者が撮影した。

M.S.ヴォロンツォフ肖像画